

もうひとつの参と商

— 魯迅と胡適に関する覚え書 —

廣野行雄

I. はじめに

この先しばらく魯迅と胡適のことについて考えてみたいと思っている。

たとえば、いま、北京の大型書店の近現代文学関係の棚には、どのような本が並んでいるのだろうか。ここ数年、胡適についての研究書が目立つという印象がある。もともと、ある時期の中国で胡適がどのような存在として扱われていたかを知っている者の目に、ことさらにそのように映るというだけのことであるかもしれない。ともかく、文化大革命中は官許公認の文学書は、『紅樓夢』と魯迅だけであったし、胡適はといえば、中国本土では、1954年に兪平伯の『紅樓夢研究』に端を発した批判キャンペーンの標的となり、その後その名前が出てきても反面教師的な文脈に限られていたから、彼についての専門研究書が何種類も出版されているということ自体が、ややおおげさにいえば、隔世の感をもよおさせるに足ることではあった。

魯迅と胡適のこと、と書いたが、魯迅はともかくとして、胡適については、ほとんど何の蓄積もないので、両者の比較研究ではもとよりなく、胡適という他者を通して見た魯迅研究ということになるろうかと思う。

手元にある何冊かの胡適を論じた著作に目を通したときに気づくのは、たとえば、孫郁『魯迅と胡適 — 20世紀中国文化に影響を与えた二人の智者¹⁾』、郭運恒『魯迅と胡適 — 文化思想研究²⁾』、易竹賢『新文学天空の二大巨星 — 魯迅と胡適³⁾』のように、副題を含めて題名に胡適と魯迅を比較した内容であることを明示したものもあるが、そうではないものも必ずといってよいほど魯迅との比較に紙数を割いていることである。つまり、それほど二人は対蹠的な存在と見られているということであろうか。しかし、一方の魯迅の研究書は、たしかに汗牛充棟もただならぬありさまで、とても精確は期しがたいが、大まかな印象としては、魯迅を論じるにあたって胡適をひきあいにだしているものはほとんど見かけないように思う。

ということは、近年しきりに胡適が評価されるのは、あるいは魯迅に対する一種のアンチテーゼとしての意味あいがあるようにも思われる。実際、中国の知人で、

文革中の経験によって魯迅アレルギーにかかっている人の口から好対照をなす人物として胡適の名が出たのを耳にしたこともある。一心同体とっていいほどの仲であったのに、人生の道半ばで不和となった魯迅と周作人兄弟を、同時に天に現れぬ星座「参」と「商」に喩えた書があったが、兄弟ではないが文学革命、白話運動の同志であった魯迅と胡適にもその喩えがあてはまるのか。はたして二人はそれほど相容れない存在だったのか、研究の前提として確認しておきたいというのが拙文起草の趣旨である。

II. 胡適と国民党

胡適は、終始共産主義、共産党に批判的な姿勢をもちつづけ、満州事変によって始まる30年代、汪精衛ついで蒋介石の外交政策ブレーンであり、日中戦争中は駐米大使、冷戦期には台湾で要職に就いていた。一方では、毛沢東が延安時代から魯迅を高く評価する発言をくりかえしてみせたことによって、両者は、それぞれ国共両党のいわば文化的な「顔」のようにみなされてきた。

近年の研究によって抗日戦における国民党軍の役割の大きさが見なおされているが、現在の共産党政権のアイデンティティが抗日戦を勝利に導いたというところにあるので、国民党の対日宥和的、というイメージは容易には払拭されないようである。胡適自身も、汪精衛や周仏海といった、国民党指導部のなかで対日抗戦に消極的だった、いわゆる低調倶楽部の人々と親しく往来していたことから対日宥和論者と見られがちであったが、実際にはむしろ対日強硬論者だったという方が正確なように思われるのである。柳条湖事件から満州国建国、熱河侵攻という日本の露骨な侵略政策にたいして、彼は「独立評論」に拠って論陣をはっている。たとえば、1933年のその名も「我々は五十年待つことができる」という文章を次のように結んでいる。

われわれは、犠牲を、さらに大きな、さらに悲惨な犠牲を覚悟しなければならない。同時に信念を保持しなければならない。信念がなければ、大きな犠牲に耐え抜くことはできないからだ。いま少なくとも次のように信じるべきである。“目下全世界の正義と支持はわれわれの側にあり、全世界の倫理的な非難は敵の頭上にある。われわれの最終的な勝利は疑いないものである”と。

一九一四年、ベルギーは、全土をドイツ軍によって占領蹂躪されたが、四年を経て名

譽を回復した。一八七一年、フランスは、アルザス・ロレーヌ両地方をプロシアに割譲したが、四十八年後に失地を回復した。

われわれは、あるいは四年待つ覚悟をしなくてはならないかもしれぬ。あるいは四十八年待つ覚悟をしなくてはならないかもしれぬ。一つの国家の千万年の生命にとって、四、五年あるいは四、五十年が何であろうか。⁴⁾

さらにその二年後、当時国民政府の主要なメンバーであった王世傑への書簡⁵⁾の中で、彼はより具体的な対日戦略構想を披瀝している。

それは、「(1) 目下の日本の東アジアにおける専横には制裁を加えることはできない、(2) 遠からぬ将来、おそらく太平洋大戦争が起こり、われらの再生が可能になる」という想定に基づいており、「その策の主旨は、いかにして遠からぬ将来の世界戦争を促進するか、いかにすれば促進が可能か、ということ」であるとする。そして、そのためには、中国が大きな犠牲を払うことを決意しなければならないという。

冷静にこの「莫大な犠牲」の大きさを見積もるなら、どうしてもまず三、四年にわたる泥沼の戦い、占領、壊滅を覚悟しなければならないでしょう。

我々は次のような事態に備えなければなりません。(1) 沿海部および長江下流域のすべてが占領破壊されるが、そのために敵は海軍を大動員しなければならない。(2) 華北での抗戦によって河北、山東、内モンゴ、山西、河南の陥落、占領にいたるが、そのために敵は陸軍を大動員しなければならない。(3) 長江が封鎖され、財政が破綻し、天津、上海が破壊、占領される。しかし、敵はそれによって欧米と直接の利害衝突を余儀なくされる。この三つの事態が、闘わずして退くことによって生じるのではなく、必死の悪戦苦闘の果てに想定される犠牲であることはいまでもありません。なぜなら、そのようにしなければ敵の大動員と財政上の崩壊を引き起こすことはできないからです。

この泥沼の戦いの中で、一切を顧みない作戦がとれ、政府の財政が尽きてもなお戦い抜くことができるなら、二、三年のうちに、いくつかの成果を手にすることが望めるでしょう。(1) 徴兵された多くの日本人民が戦争の悲惨な実態を知る。(2) 軍事費の重圧によって財政的なゆきづまりを覚えさせる。(3) 満州の関東軍を西方、南方に移動させることにより、ソ連にそのスキを突けると思わせる。(4) 世界の心ある人々の中国に対する同情を呼び起こす。(5) イギリス、アメリカに、香港、フィリピンへの脅

威を感じさせ、両国が極東における自国在留民の生命財産保護のために艦船を送り込まざるを得なくなり、太平洋における開戦の危機が高まる。

このようにして太平洋の国際戦争が現実のものになるよう促すことができれば、あるいは三、四年はかからないかもしれませんが、その三、四年の間我々は苦戦を覚悟しなければなりません。我々は、その三、四年の間は他の国が参戦することを期待せず、歯を食いしばって耐えねばなりません。我々が敵によってさんざんな目に会い、敵が攻め疲れたときになってはじめて他国の参戦と支援を受けることができるのです。これはいわゆる背水の陣の故知に倣ったものですが、これ以外には、いかなる方法も第二次世界大戦を引き起こすという難事を可能にすることはできないのです。

わたしはかつて日本の武士の自殺の方法、「切腹」を紹介したことがありますが、切腹のときには、最も親しい友人が背後にいて首を切る、「介錯」が必要なのです。日本人がこぞって切腹への道を歩み出したからには、中国が彼らの介錯をつとめないのは残念ではありませんか。上に述べた戦略をひと言で言えば、日本切腹、中国介錯の計、とでも申せましょう。

1937年7月の盧溝橋事件から41年末の日米開戦まで、いわゆる日華事変は4年間続き、日本軍は中国大陸の沿海部の諸都市とそれを結ぶ交通線を占領した。しかし、その4年間だけで、日本の軍費は280億円に上り、戦死者は30万人を超えていた。ちなみに、日露戦争全期間で費やされた軍費は20億円弱、戦死者は約10万人であった。手強く抗戦する中国に手をやいた日本は、俗に言う援蒋ルートを遮断するため仏印に進駐した結果、アメリカから石油の禁輸措置をとられ、ついに日米開戦という自棄的な道(切腹への道)を突き進むことになる。その間の中国側の受けた戦禍の大きさをもふくめて、胡適のたてた戦略はもののみごとくに的中したといつてよいだろう。

しかし、胡適の「日本切腹、中国介錯の計」がそれほどすんなりと当時の国民党首脳部に受け容れられたとは思えない。たとえば、汪精衛は、日本との戦争に他の国々をまきこむことに成功したとしても、それらの国々が勝利したあかつきに中国を分割管理するような事態になることを恐れていた⁶⁾。また、蒋介石は、従来露骨に共産党軍の掃討を抗日戦よりも優先させており、37年に第二次国共合作が成った後でさえも、数次にわたって共産党軍に対する攻伐戦を敢行したほどだったから、「一切を顧みない作戦をとる」という胡適の戦略は、—— 結果的にそれに沿った方向で事態は推移していったにせよ —— けっしておいそれと採用できるものではなかったにちがいない。

こうしてみると、国民党の首脳部が胡適を尊重する姿勢を表面上保っていたことは事実であるが、心底から彼の思想に心服していたとは考えにくい。むしろ保守派からは西洋かぶれの学者先生として快からず見られていたと思われるふしもある。胡適の方もまたそのような空気を感じ取れないほど鈍感であったとも思えない。胡適と国民党との関係は、特に日中戦争開始以後の彼の政治的経歴から推測できるような単純なものでなかったであろうことは確かである。

その意味では、あるいは、むしろ、こちらの方が重要な意味をもっているかもしれないが、1928年に国民党軍が北伐を完遂し、南京政府がいわゆる訓政を開始すると胡適は国民党の統治姿勢を批判する文章を発表し、党関係者との間で論争になっているのである。1929年には、国民政府が発布した「人権保障命令」なるものの虚偽性を暴き、暫定憲法の早期制定を要請した「人権と暫定憲法」によって人権問題をめぐる論争を惹起した。同年、孫文の「知るは難く、行ふは易し説」についての批判にまつわる論争、そして、上述の対日政策についての論陣をはっていたちょうどその時期に、一方では実質的な党独裁である訓政から脱却して民主制への移行を促していたのである。最後のものは、戦後台湾に移り住むようになってからも、蒋介石の終身総統就任への批判となって再燃することになる。

いずれにしても胡適は、国民党の御用学者といった存在ではなかった。鋭い批判(諫言)を憚らなかったという意味で忠誠であったかもしれないが。

Ⅲ. 魯迅と共産党

晩年の魯迅が、左連の結成に関わり、いわば共産党の同伴者としての立場に立ちながら、一方では、周揚などの「党官僚」に強い不満をもっていたことはよく知られている事実である。たとえば、蕭軍が左連に入るべきかどうかを胡風を通して魯迅に相談したとき、

私は殆ど深く考えてみるまでもなく、私の意見を述べることができる。すなわち、いま這入る必要はない、と。最初の事は、話せば長くなるから、ふれないでおく。最近数年間にしても、むしろ外部にいる人々の中から新しい作家が出て、新鮮な成績を上げた。ところが中に這入ると、つまらぬ紛糾の中に味噌漬けになって、声一つ立てない。私自身についていっても、どうも鉄索で縛られて、一人の人夫頭が背後から鞭で叩いているような気がしてならない。私がどんなに頑張っても、叩く。私がふり返って、自

分の誤っている点を訊ねると、彼は丁寧におじぎをして、どうも大変よくやって下さった、我々はお互いにじっくりいっている、今日は、お天気がハハハ……という。これには全く私は手も足も出ない。私は他人に向かって我々に関することは言わない。外国人に対しては避けて語りません。やむを得ない時はウソをつきます。これは何という苦しい立場でしょう？ 私のこの意見は、総司令官から見ると、罪状にちがいない(しかし、彼と私の感情は以前のおり大変良好です)。しかし私は私の方が正しいと確信しています。将来総決算したら、きっと私の計画の方が好成績であるにちがいません。現在、総司令官と「懺悔者」たちとの連絡は強化し(だから、彼らの言うことが我々の中で大きく作用しているのです)、侵攻の戦線が展開中です。本当にいつになったら晴れた空が見られるやら。もし外部の力を弱めたら、それこそ何もかもなくなってしまいます。⁷⁾

と、加盟を止めていることなどは、そのあたりの事情をよく伝えているものである。

従来、ここで述べられている魯迅の不満は、書中で「人夫頭」や「総司令官」に擬されている周揚という個人の性格や人間性にむけられている、という解釈が一般になされてきた。だからこそ、周揚自身も、当時の魯迅に対する認識、評価が十分でなかった、もしくは誤っていたという内容の発言をくり返したのであろう。しかし、最近『新文学史料』に掲載された、馮雪峰にまつわる回想録からは、魯迅の不満は、周揚個人の資質云々というよりも、むしろ集団や組織というものが必然的にもつある種の「悪」に向けられていたことを示唆している。

当該の回想録は、陳早春の「魯迅の代筆をして — 四十年前に聞いた馮雪峰の雑談(一)⁸⁾」というものである。

1972年の秋、馮雪峰は、湖北咸寧文化部の「五・七幹部学校」から北京へもどってきた。陳早春は、その一年前の夏に転属になってもどっていたので、旧知の間柄であった二人は、往き来しては、話しあうことになった。馮雪峰は、自分が経験した文芸論争、彼が知り合った多くの人物について話したが、もっとも話すことが多かったのは、彼が特に尊敬していた魯迅についてだった。ただ、馮雪峰の話は、もちろんインタビューや講演ではなかったから、その場で書き留めるということもなかった。ましてや当時は、何か書き残しておくことは、筆禍を招くおそれもあった。1972年の冬になると、二人は、ともに『魯迅全集』の修訂に従事することになったので、陳早春は仕事の性質上簡単なメモをつくり始めた。といっても、その場ですぐに書き留めるのではなく、その晩になって、あるいは何日かたって思い出して書くうちに、メモの文は、手間を省くために、ほとんどが文語と口語をつきまぜたよ

うな文体で書きつけたので、馮雪峰の言葉を自分の言葉に直した体のものでしかなかったという。しかし、構えて書いたものではないことで、かえっていきいきとした臨場感を感じさせるものになってもいたようである。

陳早春の回想の中で、特に興味をひくのは以下の部分である。

馮雪峰が魯迅の代筆をして、後に疑いをもたれ指弾されたのは、1936年の何編かの文章である。その当時、魯迅は病が重く、「二つのスローガン」論争の一方の陣頭に立っていた彼は、言いたいことがあっても言えない状態だった。また、魯迅は、相手を容易に信じることができないという長年の経験に鑑みて、当時の「国防文学」派が言っている抗日統一戦線政策にわかには賛成しかねるばかりでなく、反発さえ覚えていたし、ましてやそのスローガンの国際的背景など彼のあずかり知らぬところであった。そのような状況下で、魯迅は、状況がわからぬままに、憤激し、一部の中国共産党員の革命的立場や人品道徳に懐疑や嫌悪すら感じていた。馮雪峰が、1936年に上海へ行って最初に魯迅と会ったとき、魯迅の第一声は、「君が行ってからの数年というもの、彼らにいいようにされてきたよ」（「いいようにされる」という言葉であったかはっきり覚えていないが、『回憶魯迅』中の「この二年間のことについては、ゆっくり話そうと思う」という表現は、よほど婉曲になっているという説明であった）というものであった。「共産党が政權をとったら、まずまっ先に血祭りに上げられるのは僕だね」（傍点廣野）とも言ったという。李霽野にもそれについての回想記があり、主に覚えているのは、雪峰のきまじめさ、誠実さで、雪峰はその言葉を聞くと非常に狼狽して、真剣に手や首を振って、「そんなことありえませんが、ありえませんが」と言った、という（李霽野『彼は善良な人々の心に生きている』）。1972年11月29日の晩、雪峰はこんなことも言った。「魯迅は、『海上述林』を編集出版したとき、これは死者を弔うためのものだけではなく、わたし自身を弔うものでもあるのだ、と言うんだ。魯迅は、瞿秋白のことを共産党の捨て子だと思っていたんだ。」⁹⁾

陳早春も、「一部の中国共産党員の革命的立場や人品道徳に懐疑や嫌悪すら感じていた」と周揚などの個人の人格に問題があったという解釈をとってはいるが、陳早春の解釈何如はこの際問題でないことはいうまでもない。肝心なのは、魯迅が、瞿秋白同様自分も共産党から疎外された存在であると感じていたということであり、共産党も権力掌握のあかつきには、組織の意思に盲従することを拒み、敢えて異をとる人間の存在を許そうとはしないであろうことを見抜いていたことである。

それは、57年の反右派の時代に、「もし今魯迅が生きていたらどうだったでしょうか」と訊ねられた毛沢東が、しばし考えた後、「監獄に入れられても書こうとしたかもしれないし、大局を見て発言を差し控えたかもしれないな」と答えたという「逸話」とたくまらずして呼応している¹⁰⁾。

魯迅の「政治」を見る眼は、あるいは胡適以上に冷ややかであり、特定の政治組織を無批判に支持、信奉することはなかった。

IV. 寛容と非寛容

胡適が、おもてだつて魯迅を批判するような文章を書いたことはなかったようである。

胡適は、「寛容と自由¹¹⁾」と題する文章の中で次のように述べている。

母校カーネル大学の歴史学の大家ブル(George Lincoln Burr)に最後にあった時、彼が話した、ある言葉が今でも耳に残っている。それは、「年をとるにしたがつて、寛容(tolerance)ということが自由にもまして大切だと思うようになった」というものだった。

ブルが亡くなってから十数年たつても、この言葉はいよいよ胡適にとって色あせることのない箴言になっていったという。彼自身も、年をとるにしたがつて、寛容ということが自由にもまして大切だと思うようになり、時には、寛容が一切の自由の根源であり、寛容ということがなければ自由というものもないとさえ思う、というのである。

宗教の自由、思想の自由、政治の自由、その歴史の上において、寛容さこそもっとも得難く、また希有な態度であることを人々はみな知っている。しかし、人類はその習性として自分と同じものを好み、異なるものを悪む。宗教団体は、いつも自分の宗教教義や信仰は正しく、間違っているはずはないと信じて、自分と異なる教義、信仰は誤っており、異端邪教であると信じて疑わない。政治団体は、いつも自分の政治的主張は正しく、間違っているはずはないと信じて、自分と異なる政治的見解は絶対に間違っており、敵であると信じて疑わない。

胡適はそれをルター、カルヴァン、ブツァーの異端弾圧を例に引いて説明している。さらに、文学革命で白話運動を提唱した時の陳独秀の思い出とともに自戒の言葉をもって文を終わっている。

「しばしば思うのだが、わたくしたちは、次のように自分を戒めるべきであろう。

もし他人がわれわれの意見を受け容れてくれることを望むなら、まず自分が他人の見解を受け容れられるだけの度量を涵養しなければならない、と。最低限、“われわれの主張は絶対に正しい”とは、思わないようにと自分を戒めるべきである。われわれプラグマティズムの訓練を受けた者は、もとより“絶対の正しさ”というものを認めないし、ましてや“われわれの主張は絶対に正しい”とは思うことはできないのである。¹²⁾」

寛容を座右の銘にしているからといって、その人間が実際にそれにふさわしい行動をとれるかどうかは、また別の話であることはいうまでもない。むしろ、両者が一致しない例には事欠かない、といってもいいだろう。だが、胡適の場合は、少なくとも誠実に実践しようとしていた、とはいえそうである。

たとえば、1936年11月、魯迅の死の直後、反共主義と魯迅ざらいで有名な作家蘇雪林が、胡適宛てに魯迅を非難した手紙を送った。それには蔡元培宛の書簡が付されていた。魯迅の葬儀の葬儀委員長を務めたのは蔡元培であったが、蘇雪林は書中、魯迅がいかにかそれに値せぬ人間であったか、そして、蔡元培が葬儀委員長を務めたことがいかにか左翼陣営を利することになるかを縷説していた。

それに対し胡適は、次のようにたしなめている。

あなたが憤慨されるお気持ちはわかりますが、わたしは私人としての行為を攻撃すべきではないと思うのです。魯迅は、吠え立てるようにわたしたちを攻撃しましたが、実際にはわたしたちはそれによって少しでも損害を受けたでしょうか。彼はもう亡くなったのですから、我々は枝葉末節にはこだわらず、もっぱら彼の思想がけつきよくどのようなものであったか、ついにはどのような変遷をたどったのか、彼が信じていたものはいったい何であり、否定したものは何であったのか、価値があるのはどんなことであり、価値がないのはどんなことであるのかを検討すべきです。そのような批評なら、成果を生む可能性があります。あなたが蔡先生へお書きになった手紙の中にある、「すっかり金を貯め込んだ」だの「病気になるると日本人の医者にかかり、鎌倉に療養に行こうとした」だのというのは、わたしたちがとりあげるに値しないことです。「じつに知識人の衣冠を汚す恥さらし、二十五史の儒林伝に例を見ない奸悪の小人」などとあるのも、腹立ちまぎれも度が過ぎています(特に後半の句など話になりません)。こういうのは旧い文体が陥りがちな良からぬ調子であり、わたしたちが深く戒むべきところです。

およそ人を論ずるにあたっては、公平を持さなくてはなりません。愛するもその短所を知り、悪むもその長所を知る、であってこそ公平というものです。魯迅にももちろん

良いところがありました。彼の初期の文学作品や小説史研究、これらはどれも優れた仕事です。通伯先生¹³⁾がかつて小人張鳳挙の言葉を妄信して、魯迅の小説史が塩谷温の受け売りだと言ったために、魯迅から終生忘れぬというほどの恨みを買いました。現在、塩谷温の文学史は、すでに孫良工によって中国語に訳されていますが、この本は私や魯迅が小説を研究する以前のもので、その考証たるや粗漏笑うべきものです。魯迅が塩谷温を引き写したというのは、まったく濡れ衣だったわけです。塩谷の一件では、わたしたちが魯迅の濡れ衣を晴らさなくてはならなかったのです。できることなら通伯先生は、そのことを文章にすべきでした。それが、とるにたるべき「gentlemanの鼻もちならぬ態度¹⁴⁾」というものでしょう。そうしてこそ相手を心服させることができようというものです。¹⁵⁾

30年代以降、魯迅の著作集に入れられている文章で、胡適を風刺したものもあるにはある。たとえば、1933年3月22日「申報・自由談」に発表された「光明のいたるところ¹⁶⁾」がそれである。しかし、同じようにこの時期に書かれ、『偽自由書』に収められている、胡適を名指しで批判した文章でも、同年3月6日「王道詩話¹⁷⁾」、同26日に、当時魯迅の用いていたペンネームである何家干の署名で同紙に載った「魂を売り渡す秘訣¹⁸⁾」などは、その後、魯迅の雑文集『偽自由書』におさめられたが、実は、この時分非常に親密に往来していた瞿秋白の筆になるものであることは夙に明らかになっている。いま、後二者の文章を改めて読みかえた時、彼の他のいかなる文章にもはっきりと刻印されている魯迅らしさとは何か異なっているという、一種の違和感めいたものを感じるのには、あながちそれが魯迅自身のものではないことを知っていることからくる先入観のなせるわざだけではないように思う。たしかに魯迅は、胡適にたいして批判的な見方をしていたにちがいない。じつは、それ、つまりその胡適にたいする批判的な視線こそが冒頭に述べた、「魯迅と胡適について考えてみたい」ことの中身でもあるのだ。

魯迅は、『偽自由書』の「前記」に次のように書いている。

ただ私の欠点は、時事をあつかうとき節度を超えること、また伝統的な悪を攻撃するのに類型を取りあげすぎることにある。そして後者はとくに時勢に合わない。なぜなら、類型を描くとは、悪いところを病理学で用いる図のような描くわけだから、たとえばデキモノであれば、その図は一切の同じデキモノの標本でなければならない。したがって甲のデキモノにも似ていれば、乙のデキモノにも似ていることになる。ところが読者

は、そんなことはおかまいなしに、特定の甲なら甲という人間のデキモノが描かれていると思ひ込む。そして不当な侮蔑を受けたとし、描き手を不倶戴天の敵と考える。たとえば、むかし私は狃ころ論¹⁹⁾をやったことがある。これは特定の人物を名ざしたわけではないのに、自分で狃ころ性があると感じている連中が自分で自分のことだと決めてしまった。そして不倶戴天の敵をやっつけにかかった。その方法は、文章の是非はたなにあげて、まず作者が誰であるかを究明する。そして、他の一切を省みずに、ひたすら作者に人身攻撃を加えるのである。²⁰⁾

魯迅が攻撃しているのは、「伝統的な悪」なのであって、いかにそう見えようとも何某という個人ではないのである。それこそは魯迅を魯迅たらしめている希有な資質の一つと言えよう。それはなにも『偽自由書』だけに限ったことではない。それに続く『准風月談』の「『感旧』以後」などにも一貫しているものである。

たとえば、上にあげた瞿秋白の二編の文章は、胡適をブルジョア文学者グループの一員、あるいはその代表、黒幕という「くくり方」で批判しているように見える。それも一種の「類型」化であろうか。いや、魯迅の言うそれとは微妙に、しかし決定的に異なっているのだ。「光明のいたるところ」を書いているとき、というよりも「North China Daily News」で胡適の中国の監獄にかんするレポートを読んだとき、魯迅の脳裏には、柔石のことがあったにちがいない。あるいは、劉和珍や楊徳群の面影をも思い浮かべていたかもしれぬ。権力というものが、おのれに異をとなえる者——権力とは敵をつくりだし、それを人々に告知する装置の謂であるとすれば、その意味での敵——にいかに酷薄になれるものかを彼は身近な存在を奪われるという痛苦とともに知らされていた。だから、権力が権力である以上必然的にもたざるをえない「悪」についての認識をあいまいにするような言動を撃たずにはいられなかったのである。しかも、彼が、胡適の論じた対象について、「火・王道・監獄²¹⁾」を書き、彼自身の見解を示したことは、批判の矛先が胡適という個人にではなく、胡適のレポートにあらわれている胡適的な考え方、胡適的な認識に向けられていることを明らかにしてはいまいか。だから、もしそのような言動が胡適ではなく、いわゆる左翼文学者の誰それによってなされたとしても、彼はけっして見過ごしにはせず、きびしくたしなめたにちがいない。「左翼作家連盟についての意見²²⁾」や「罵倒と威嚇は戦闘ではない²³⁾」などが明瞭にそれを証しだてているではないか。

魯迅が生涯論争に明け暮れ、その論鋒の鋭さゆえに論敵から「酷薄」と恐れられたことから、不寛容な人物の代表のようにもたなされ、その点で胡適と好対照をな

すようにあつかわれるのが常である。建国から文革の終焉までおよそ四半世紀の長きにわたって、きびしい政治キャンペーンの連続であったことを思えば、それもまた無理からぬことであるかもしれない。だが、そのような対比の仕方は意味のあるものなのであろうか。文脈、状況、批判主体と批判対象の力関係といった要素を捨象して、論難、批判という外形的な形式のみを問題にするのであれば、鋭く、徹底した風刺、批判をする人間はすなわち非寛容ということになりはしないか。

1980年に作家の王蒙が書いた「“フェアプレイ”は実行すべきことを論ず²⁴⁾」という文章は、上の危惧が危惧だけに終わらぬものであることを示す一事例となっている。ここで王蒙が一般的な意味でフェアプレイという言葉を取りあげているのではないことは、引用符が付いていることでも解るが、典故になっているのは、魯迅の『『フェアプレイ』はみあわすべし』である。当該の文章については、文末の注19)において概略を説明してあるのでここではふれない。

王蒙は言う。

五十年以上前、魯迅先生は、“フェアプレイはみあわすべし”という革命の徹底性に富んだ有名な命題を提起された。解放後政治運動がくり返される度に、この名作が特に他を圧して、かつてないほど宣揚され、普及するとは、当時、魯迅先生は、多分想像されなかったであろう。“フェアプレイ”は、1957年にもみあわすべきだったし、1959年にもみあわすべきだった。1964年、1966年、1973年、1976年までずっとみあわすべきだった。このぶんでは、みあわすべしは、超時間的、超空間的な真理になりそうだし、“永久に実行されず”に変更され、したがって“みあわす”ことを根本的に否定することになりそうである。²⁵⁾

けっきょく“フェアプレイ”は実行すべきなのだろうか。半世紀前の、暗黒の旧中国において、魯迅先生が深く慮って“みあわす”よう呼びかけられた時点でも、彼の答えは、しかり、というものであった。彼は当時こう言っている。「仁愛の人たちは、あるいはこう問うかもしれぬ。『それでは、けっきょく“フェアプレイ”は必要ないのか』と。わたくしは、直ちに答えよう。『もちろん必要だ。しかし、今はまだその時期ではない』と。」

では、何時その時期になるのだろうか。魯迅先生は答えていない。当時、その問いに答えられる状況ではなかった。しかし、常識に照らしてみても、魯迅先生は百年後、千年後を予期されてはいなかったであろう。²⁶⁾

何時になったらその可能性が現実的なものになるのであろうか。おおまかにいって、人民革命が勝利し、無産階級が全国的な規模で政権を握り、共産党が弾圧され、迫害される立場から、政権党へと変わった後は、基本的に“フェアプレイ”実行の条件が整ったのである。²⁷⁾

王蒙は、「魯迅先生であってもすべての発言が真理であるとは限らない²⁸⁾」という。当然のことである。では、魯迅はどの点において間違っていたのであろうか。

1957年というのは反右派闘争を、59年は廬山会議、64年は四清運動、66年は文革、73年は批林批孔、76年は第一次天安門事件をそれぞれ指しているのであろう。このうちの幾つかの事例は、権力内部の奪権闘争の性格をも有っていたが、基本的には、権力（時の党中央）による粛清・弾圧であった。打たれる「犬」は、党の政治姿勢や時時の政策に批判的な言動をとった者であったが、まったくの濡れ衣であった者も多かった。彼らは、彼らを取り調べ、拘束し、改造という名の処罰を加える権力によって、右派分子、右傾反党分子、反革命分子、修正主義分子、犯罪分子等々と様々に分類され、名づけられた。つまり、この場合「水に落ちた犬を打つ」というのは、権力によって「水に落」とされた、すなわち指弾処罰された者を、さらに「打つ、すなわちなお処罰を加える、という謂になる。いったい魯迅は、ほんとうにそのようなことを「提起」したのだろうか。

魯迅の当該の文章が直接「打」っているのは、女師大紛争で辞任した教育部総長章士釗であり、例として引いているのは辛亥革命のおりの旧勢力であった。したがって、「打つ」主体は、当局から弾圧された女師大の学生たちであり、秋瑾に代表される辛亥革命の犠牲者であり、ひいてはその者たちの側に立って発言している自分や林語堂などの言論人であった。魯迅のいう「打つ」とは、力なき民が政治権力に抵抗し、批判し、彼らの仕打ちを記憶しつづけることに他ならない。人を咬む犬、すなわち人を己の意の如くさせようとする権力は、いったん「水に落ち」ても、人が「フェア（寛大）」に取り扱い、安易に復権を許せば、またしても、そして今度は喉ぶえに咬みついてくるかもしれないのだ。だからこそ魯迅は、『水に落ちた犬を打』たぬは人の子弟を誤る²⁹⁾』というのである。現に、「三・一八事件」の後、女師大事件で章士釗を追いつめた魯迅、周作人、林語堂ら、さらには章士釗提訴を担当した弁護士高穰までが当局のブラックリスト（逮捕予定者リスト）に載せられ、そのリストを掲載した新聞「京報」の編集長邵振青は逮捕処刑されたではないか。

それが清朝であれ、軍閥であれ、国民党であれ、たとえ共産党政権であっても、国家権力がその暴力装置を用いて己の意に従わぬ者を弾圧することと無力な民が権力に対する批判精神と警戒心を失わず、抑圧に頑強に抵抗しつづけることとは百八十度方向が違うことなのである。

たしかに、魯迅の言ったことがすべて真理とは限らない。しかし、こと「フェアプレイ」論については、彼の言ったことはけっして的はずれではない。それは、その当時に正鵠を射ただけでなく、80年以上たった今日においてもまさしく核心をついているし、「政治」というものが根本的にその性質を変えない限り、どうやらこのさきもずっと心にとめておくべきものであるにちがいない。

V. 終わるにあたって

従来、魯迅と胡適の最も大きな相違点とされてきたのは、その政治的立場であり論調や批判態度であった。たしかに二人は、それぞれ共産党と国民党という、血で血を洗う内戦の相手どうしの「同路人（同伴者、シンパ）」であった。しかし、今日の目から見れば、もはや国共両党の違いは本質的なものとはいえず、それよりもわれわれが目すべきは、彼ら二人の「政治」に向きあう姿勢、もしくはそれとの間合いのとり方なのではあるまいか。そのような視点に立てば、両者の姿勢が、それほど対蹠的であり、対極にあるものだとはいえず、不十分との指摘は甘んじて受けるにせよ、拙論の考察からはうかがえないように思う。できあいの政治的概念にもたれかかって思考停止に陥ることを峻拒する、倜儻不羈という点では、強弱の差はあるにせよ、むしろ似ているとさえ言いえるのではあるまいか。

魯迅は、終生論争に明け暮れたといわれる。彼の、いわゆる雑文の大半を占める文章が polemical な性格をもっていることは事実であり、それが彼の好戦的かつ執拗というイメージをつくりあげる一因となっているのであろう。実は1998年、同じ出版社から「現代中国の運命に影響を与えた大論争書系」と銘うった、魯迅と胡適の論争集³⁰⁾が同時に出版されているのである。百科事典のような大型の判型で、一冊が一千頁近くある。興味深いのは、魯迅のそれが上下二巻であるのに対して、胡適の方は上中下三巻に及んでいることである。もちろん二人の享年が55歳と71歳と、20年近い差があることやその種の文章を書き始めた年齢も胡適の方が10歳ほど若かったことを考慮しなければならないのだが、それにしても魯迅をして争論の人とするならば、胡適もまた魯迅にまさるとも劣らぬ争論の人であり、言論の戦いに明け

暮れた一生だったといわねばならぬであろう。また、魯迅が論争において、いかに辛辣なレトリックを駆使していようとも、けっして単なる個人攻撃に終わってはならず、人間や組織や社会がもつ、普遍的な弱さや悪や矛盾をこそ打とうとしていたことは、すでに見た通りである。彼はある時以後あまり小説を書かなくなったが、論争の文章において文学者であることを証していたのである。

然くわれわれは、魯迅非寛容、胡適寛容という常套の図式にも依拠できぬとすれば、彼らの、もはや蓋然性に乏しいともいえる離反疎遠にいたる所以をいまいちど五・四文学革命、少なくとも国故整理運動の時点にまでたちかえって考えてみるのも徒勞の所為とのみは言えないのではあるまいか。

注

- 1) 孙郁「魯迅与胡适—影响20世纪中国文化的两位智者」沈阳，辽宁人民出版社，2000年。
- 2) 郭运恒「魯迅与胡适—文化思想研究」北京，线装书局，2007年。
- 3) 易竹贤「新文学天穹两巨星—魯迅与胡适」武昌，武汉大学出版社，2005年。
- 4) 胡适「我们可以等候五十年」（「独立評論」第44号原載）。拙論は、『胡适论争集下卷』（耿云志主編，北京，中国社会科学出版社，1998年）に拠った。訳文は，拙訳。
- 5) 1935年6月27日付王世傑宛書簡。『胡適之先生年譜長編初稿・第4集』原載。拙論は、『胡适论争集下卷』（耿云志主編，北京，中国社会科学出版社，1998年）に拠った。訳文は拙訳。
日本近代史研究者加藤陽子は、この胡適の戦略を、「腹の据わった」「暗澹たる覚悟」と表現して称賛している（『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社，2009年）。
- 6) 1933年11月22日付胡適宛書簡。『胡適来往書信選・中』北京，中華書局，1979年，220～221頁。
- 7) 1935年9月12日付胡風宛書簡。訳文は，岩波『魯迅選集』の松枝茂夫訳に拠った。
- 8) 陈早春「为魯迅代笔 — 近四十年前听冯雪峰闲聊（一）」（『新文学史料』2010年第2期，通卷127期，人民文学出版社，77～82頁。）

筆者の陳早春は、手元の文学事典によれば、湖南省隆回の人で、1934年生まれ、人民文学出版社の社長、総編集長であったが、魯迅や馮雪峰についての論文や著書がある。特に、中国現代文学史に大きな影響を与えながらきわめて不遇であつ

た馮雪峰に光をあてた研究は学界の注目するところであるとしている。陳は、1965年に馮雪峰に出逢い、1976年に亡くなるまで交際しつづけた。

- 9) 前掲7) 78頁。1973年1月6日馮雪峰談話記録。
- 10) 魯迅の息子周海嬰の『我与魯迅七十年』(南海出版公司, 2001年)によれば、毛沢東が1957年の反右派闘争に際して上海に立ち寄ったときに、湖南の人羅稷南の問いに対してこのように答えたという。
- 11) 胡适「容忍与自由」(1959年3月16日台北「自由中国」第20卷第6期原載)。拙論は、欧阳哲生編『容忍比自由更重要 — 胡适与他的论敌・下』北京, 时事出版社, 1999年に拠った。
- 12) 前掲11) 780頁。
- 13) 胡適と同じ欧米留学組で「新月」派の陳源のこと。通伯は、その字。
- 14) 陳源は、『現代評論』の「閑話」のなかで、「(自分たち『現代評論』の美点は)一切の批評が学理と事実の上に立っており、デタラメの罵言ではないことだ。これは『紳士の鼻もちならぬ態度』かもしれないが。」と暗に対立する魯迅たち「語絲」派をあてこすった。
- 15) 1936年12月14日付蘇雪林宛書簡。前掲6) 所収。訳文は拙訳。
- 16) 「“光明所到…”」(1933年3月22日「申報・自由談」原載。後、『偽自由書』所収)
- 17) 「王道詩話」(1933年3月6日「申報・自由談」原載。後、『偽自由書』所収)。18) と同じく瞿秋白が魯迅のペンネームを使って書いたもの。
- 18) 「出卖灵魂的秘诀」(1933年3月26日「申報・自由談」原載。後、『偽自由書』所収)
- 19) 魯迅の『『フェアプレイ』はみあわすべし』(原題「论『费厄泼辣』应该缓行」, 1926年1月10日「莽原」第1号原載。後、『坟』所収)を指す。
林語堂が、雑誌「語絲」に周作人「伏園に答え<語絲の文体>を論ず」をうけて書いた「<語絲の文体>にひと言 — 穩健, 惡態, フェアプレイ」に触発されて書かれたもの。魯迅は、失脚した政客を水に落ちた犬にたとえ、政治風土の異なる中国へ安易に外国の風習を適用することの危険性を指摘した。
- 20) 魯迅『偽自由書・前記』(北京, 人民文学出版社, 1980年, II~III頁) 訳文は、筑摩書房『魯迅文集』の竹内好訳に拠った。
- 21) 魯迅「火・王道・監獄 — 二三の支那の事について」(日本の雑誌『改造』1934年3月号に日本語で寄稿したもの。後、中国語訳して『且介亭杂文』所収)

- 22) 魯迅「对于左翼作家联盟的意见 — 三月二日在左翼作家联盟成立大会讲」（『萌芽月刊』第1卷第4号原載。後、『二心集』所収）
- 23) 魯迅「辱骂和恐吓决不是战斗一致『文学月报』编辑的一封信」（『文学月報』第1卷第5/6合併号原載。後、『南腔北調集』所収）
- 24) 王蒙「论“费厄泼赖”应该实行」（『桔黄色的梦』天津，百花文艺出版社，1984年，268～276頁所収）

王蒙は同じ文章の別の個所で、「国内外の階級の敵に対して、一握りの反革命分子、刑事犯罪分子に対してわれわれは手心を加えたりしないし、プロレタリア独裁の鎮圧機能を排除することはあり得ない。」「(そのような) 敵に対して“フェア”であることをみあわせ、水に落ちた犬を撃ち、逃げ場を失った賊を追いつめるのは、正しいということになる。敵に対しては手厳しくあるべきだ。敵に慈悲を与えるのは人民に残忍であることに他ならぬ」と言う。これは、中国共産党を特別視し、その抑圧的な言論統制を容認するものであり、そのため、彼が「魯迅先生の“みあわせる”という言葉を看板に掲げて、無法、横暴の限りを尽くす“全面独裁”を行った」と非難する「四人組」の言葉を鸚鵡返しにくり返す結果に陥っている。

- 25) 前掲24) 268頁。
- 26) 前掲24) 269頁。
- 27) 前掲24) 269頁。
- 28) 前掲24) 275頁。
- 29) 前掲19) の中の一章の題名となっている。
- 30) 胡適は、注4) に掲げたもの。魯迅のそれは、『魯迅論争集』上下巻（陈漱渝主编，北京，中国社会科学出版社，1998年）。それぞれ論争ごとに胡適、魯迅とその論敵の文章を併載するという体裁をとっている。